

研究課題：緩和ケア患者の口腔機能低下の標準的評価方法と介入方法の確立

研究者名：松尾浩一郎<sup>1)</sup>、大野 友久<sup>2)</sup>、藤井 航<sup>3)</sup>

所 属：<sup>1)</sup>藤田保健衛生大学医学部歯科、<sup>2)</sup> 聖隷三方原病院歯科、<sup>3)</sup>藤田保健衛生大学医学部七栗サナトリウム歯科

【緒言】がん終末期では多くの口腔合併症が出現するため、緩和ケアにおける口腔ケアが必要となる。しかし、緩和ケア病棟に入院してくる患者の原疾患、病期、全身状態などは様々であるため、全ての緩和ケア入院患者への歯科介入が必要なわけではない。本研究課題の最終目標は、がん終末期患者の口腔問題が頻出してくる時期に適切なタイミングで歯科医療者が介入できることとする。本年度は、当院緩和ケア病棟に入院した時点での口腔合併症の出現状況と、死亡までの期間（days to death, DTD）との間に関連性があるか後ろ向きに検討した。

【方法】平成 25 年 4 月 1 日から平成 26 年 3 月 31 日までの間に、緩和病棟へ入院後、死亡退院となった患者のうち、当院緩和病棟入院時に歯科検診を受けた患者 105 名分の患者のデータを研究対象とした。緩和病棟入院時から死亡までの期間が 28 日未満の 56 人を短期群、28 日以上 49 人を長期群と分類した。検診時に調査した口腔の器質的問題と機能的問題に両群間で差があるか比較検討した。また、炎症と栄養の指標として、血中の白血球数(WBC)、CRP(mg/dL)、血中アルブミン濃度(Alb, g/dl)についても両群間で差異があるか検討した。

【結果】器質的問題では、口腔乾燥、舌の粘膜炎、易出血性が短期群で有意に多く出現していた。一方、舌苔やカンジダについては両群間で有意差はなかった。機能的問題では、嚥下障害が有意に多く出現しており、また口腔ケアの介助が必要な者の割合が有意に増加していた。ロジスティック回帰分析の結果では、口腔ケアの介助 ( $p = 0.043$ ) と口腔乾燥 ( $p = 0.048$ ) が DTD と有意な関連性を示し、出血斑も有意ではなかったが、弱い関連性を示す傾向にあった ( $p = 0.051$ ) WBC, CRP, Alb の値は両群間で有意な差を認めなかった。

【結論】本結果より、長期群では口腔内の症状が顕著に現れないが、死期が迫ると徐々に口腔内の症状が出現していた。特に、口腔ケア介助に必要性や口腔乾燥が顕著に出現しやすくなることが明らかになった。本結果より、これらの症状の出現が、専門的な歯科介入の指標になることが示唆された。また、嚥下障害患者の割合が増加し、経口摂取を継続する者の割合が減少する傾向にあった。検診後、一定時期に再評価を行うことが口腔問題の見落としを防ぐためにも必要と考えられた。今後は歯科介入によるタイミングを図るための口腔スクリーニング用紙の開発に取り組んでいく予定である。